

論理的文章における冒頭文の分類と機能

長 坂 水 晶

要 旨

日本語の文章の特徴や日本人の表現行動の特徴を明らかにするためには、日本語の文章や談話を詳細に観察し、実態を捉えることが必要である。そこで小論では文章における冒頭文の特殊性に着目し、実際に日本語の論理的文章 826 例を収集して冒頭文の性質と機能の考察を行った。まず文の表す内容の性質から冒頭文を分類して主要な五つの類型を見出し、各型の内容の性質と表現上の特徴を記述した。更に文章の種類による冒頭文の傾向の違いや冒頭文に現れない内容の考察を行った。以上のことから冒頭文が持つ機能を明らかにした。

〔キーワード〕 冒頭文 論理的文章 機能

I はじめに

近年盛んな談話研究において、日本語母語話者と日本語学習者は、同じ日本語を話しても話の展開のさせ方が異なることが指摘されている。⁽¹⁾ 翻訳に際して原文の文順が変更されることも観察されている。⁽²⁾ これらは文章構成には各言語や文化の特色が表れるということを示すものである。したがって日本語にも文章の流れに独自の特徴があるということが出来る。そこで小論では日本語の文章の特徴を捉えるために、冒頭文の分析を試みた。

文章は書き手の創意と個性によって、いかようにも構成され得るものではあるが、どのような文でも冒頭文になるとは言えない。例えば、

「そしてわたしが話す番になった。」（高橋源一郎『虹の彼方に』冒頭）
これは小説ではあり得ても、物事の論証や出来事の説明を行う文章の冒頭には現れない形の文だと言える。つまり私たちは小説ではなく論文や意見文、書簡等の実用的な文章には常識的な書き出しの型が存在することを経験的に知っているのである。また、文章は最初から目的や意図があって構成されるもので、ある筋道を通して結末に至る統一体と考えられる。即ち文章の冒頭に置かれる文は、先行する文脈を持たず、文章の展開の出発点になり、文脈中にある他の文とは異なった特別な機能を担うと考えられる。つまり冒頭文は日本語の文章の書き出しとして自然だといえるような性質と機能を備えているはずである。小論ではこのような考えに立ち、冒頭文を扱う。

II 先行研究と課題

文章作法や文学研究で冒頭が問題にされるのは、専ら修辭的效果や印象の強さについてであったが、文章論の立場では時枝(1960)によって冒頭部が文章の構成に関わるものとして重視されるようになった。市川(1978)や林巨樹(1983)も冒頭部のあり方を重視し、その類型を独自に見出しているが、ここで対象となったのは「小説」や「文章一般」であった。いうまでもなく冒頭の重要性は文章の種類によって異なる。どのような展開の型でもありうる「小説」と、常識的な展開が求められる「論説文」を同じ枠組みで論じることはいかなる点でもできないはずである。また上記の研究はいずれも「冒頭部」の範囲を明確に示していない。

実際の文章にあたって冒頭文の調査をしたものには林四郎(1973)がある。林は文章の流れを開始する起動力を持つ文を「始発型」の文として分類し、そこに見られる型を詳細に記述している。ただし、ここで扱われた文章も小学校教科書の生活文や物語文である。また林が始発型に分類したのは会話文における「話頭文」も含んでおり、冒頭文だけではなかった。

III 冒頭文の内容の性質と種類

(1)研究の課題と方法

小論では論理的文章の冒頭第一文を調査し、その内容やそこに共通して見られる表現上の特徴を実例から探る。従来の研究のように文章の内容や構造との関わりから冒頭部を扱うのではなく、冒頭文が表す内容を観察し、その類型を記述するという方法で、日本語の文章に於ける冒頭文の機能を明らかにする。

小論でいう論理的文章とは「自説を主張するために考えを筋道立てて述べ、相手を説得する文章」を指す。対象を論理的文章としたのは、冒頭にどんな文があってもおかしくない文学的文章を取り扱わない、という意図による。飛田・大熊(1975)の分類を参考に、その枠に入る文章を次のように設定した。

- ・ 論説文；社説や論評など、出来事や事柄について考えを主張する文章。
- ・ 論文；専門的な学問分野における研究論文。
- ・ 評論文；書評・音楽・映画・美術等、創作物の評価に関する文章。
- ・ 意見文；新聞の投書欄の文章。

いずれも1990年前後を中心とした全 826例の資料である。多くの人に読まれている一般的な雑誌や新聞から無作為に抽出した。筆者の句点をもって一文と

し、採集した。文章の種類によっては数に多少の差が出たが、どれも 200例前後になるように収集した。

(2)冒頭文の分類

論理的文章 826例の冒頭文を観察した結果、冒頭文には次のような型が見出された。一つの文に複数の内容が認められる場合もあるが、分類にあたっては「最も重要」「最も認めやすい」ということを基準に類別した。以下で分類の項目ごとに、分類基準や表現上の特徴を述べる。⁽³⁾

1. 事象の提示……………①事実の提示／②状況・現象の提示
2. 問題の略説……………①話題の背景の説明／②話題の内容の説明
3. 筆者の見解の提示…①賛否の提示／②評価・感想の提示／③主張・要求の提示／④疑問の提示／⑤推定による判断の提示
4. 論述の展開方向の…①論点の予告／②論述の立場の表明／③論述の方針提示の提示／④用語・表記上の約束の提示
5. 引用文の提示
6. その他……………呼びかけ、問いかけ、名詞提示、挨拶等

1. 事象の提示

客観的な事実や現象を表す文。その中に次の二つの類型が認められる。

①事実の提示

話題にしたい出来事や日常的に繰り返す行為等を提示する文。殆どが(1)のように「Sが(H)～した(する/した/したる)」の文型で表されるが、「という」「そうだ」等伝聞を示す文末表現により自分の見聞きしたことを報告する形で話題を提示する文もある。事件や近未来の出来事を提示する文以外には、身近での日常的な出来事、自分の経験や習慣、生い立ちや過去の業績を提示する文が含まれる。

- (1) バッハのモテット六曲がコープマンによってまとめられた。
- (2) 紀文が英国で販売している「か」が、～を命じられたという。
- (3) 韓国人学生から～という質問を受けたことがある。
- (4) ～について著者らは～の方法により調査研究を行ってきた。

②状況・現象の提示

話題とする事柄の状況、情勢を提示する文。次のような内容を持つ。
一事態の時間状況の提示

- (5) 今日は私の家の田植えである。

(6) 「地方の国際化」がはやり言葉となってから久しい。

(7) ～会議が目前に迫ってきた。

論理的文章は話題の時間的設定を冒頭で行うことは少なく、(5)のように話題とする事柄の時間枠を提示すると、物語的な書き出しになる。⁽⁴⁾ ただし(6)(7)は取り上げたい話題と現在の時間的隔たりを述べる文で、他にも11例ある。このような文は、冒頭文に特徴的な表現であり、事柄に関する共通理解事項として時間的情報の確認や話題提示を行う機能を持つものである。

—事物の存在や所在の提示

「～がある」等の形で事物の所在や存在を表す文。話題を導入する。⁽⁵⁾

(8) 「バカヤロー」という日本映画がある。

—一般的・常識的な事象の提示

「世間では／しばしば／一般的になった」等の表現を伴って、身近で日常的に起こる事や、一般的と捉えられる現象を述べる冒頭文がある。また普遍的な現象、自明の真理を述べる(10)のような冒頭文も一つの型である。

(9)～世間では男と女の違いについて語られることがしばしばあります。

(10) 生体に直流通電したとき分極現象が生ずる。

—注目すべき事態・状況の提示

(11)のように「近年／今／次々と／目覚ましい」等の表現を伴って、注目すべき事態の動向や流行について述べる文。(12)のように事態の問題点や混乱の様子や事態の変化の側面を提示する冒頭文も見られる。

(11) 北欧の作曲家や演奏家の～への進出は近年目覚ましい。

(12) 最近、高校教育に関する改革の動きが慌ただしい。

ここに共通するのは、取り立てるに足る話題性のある状況や現象だということを示している点と、個人的な出来事ではなく社会全体、ある分野や領域に広範囲に見られる現象を取り上げているということである。

2.問題の略説

話題となる問題の概要の説明で文章を始めるもので、話題にする事柄をめぐる状況や背景を説明する型と、話題自体の内容や性質を説明する型がある。

①話題の背景の説明

話題とする事柄の現状や歴史的背景を述べ、論述に必要な知識を読者に示す文。話題とする事柄の重要性や普遍性を述べる文が多い。背景を述べる場合、

多くは話題に関する新しい見解や独自の視点を提示するための前置きとなる。学術論文にこの型が多く、「てきた」という文末表現になるものが多い。

(13) 語用論は比較的新しい学問であるが、近年、とくにここ20年ほどの間に著しい進展を見せ、多彩な研究発表が行われている。

(14) 植物病原菌の同定・分類においては～の確認が非常に重要である。

②話題の内容の説明

論述の対象自体の内容や性質について説明する文。次のような内容がある。

—話題自体の内容、性質、実態、定義、位置づけを具体的に述べるもの。

(15) 本書は～による英文での日本法の本格的体系書である。

(16) 物質を構成する一番基本的な粒子を、素粒子と呼ぶ。

—事柄の成立の事情あるいは形や体裁を説明するもの。

(17) ～が書かれたのは～年である。

(18) とともにB6版、四七ページの小冊子。

—内容を具体的に説明する前に、前置きの概要を伝えるもの。

(19) 私と二・二六事件の事件記録とは、長い因縁がある。

—事物・事柄の描写、あらすじ。文学や美術など作品を取り上げる論文や評論文は、作品のあらすじや描写から始まることがある。

(20) 庭に出ると、屋根のスズメがけたたましく鳴く。

(21) ～の精緻な画像は、しかし人間の目の延長にあるもののような湿気を漂わせている。

3.筆者の見解の提示

①賛否の表明

出来事や他者の意見に賛否を表明する。今回は全10例が意見文だった。

(22) ～の提言に賛成である。

②評価・感想の提示

話題とする対象への筆者の評価、解釈、判断を提示する文。評価を述べる冒頭文は23のような名詞述語文や「～は…が(は)ドウだ」という形になる。また感想や印象を述べる冒頭文は「～を見て啞然とした。」など「自己の経験+自己の心情を表す表現」の形や、「～にびっくりした／驚いた。」の形、あるいは「～は痛ましい」といった形の文が見られる。

(23) ～江戸文化は、世界でも比類のない風刺、駄洒落の天国です。

(24) ～事件は痛ましい限りです。

③主張・要求の提示

提案や抗議など積極的に自分の考えを述べる文。「～と思う」「～ではないだろうか」等の表現が用いられる。また25のように筆者の信条や好き嫌いを述べるような冒頭文も論述の前提として積極的に自分の立場を表明するものである。ただし要求を示す冒頭文は26の一例のみで冒頭文には少ないと言える。27のように詠嘆の形で抗議を表明する文もこの型に分類した。

(25) 多くの美術史家がそうであるように、概して私はルノワールが「嫌い」である。

(26) 国民をなめないでください。

(27) 「日本語は世界でも珍しい言語だ～」と思い込んでいる日本人のなんと多いことか。

④疑問の提示

「(なぜ)～ノカ」という表現で疑問を提示する。学術論文によく見られる。

(28) 女性と男性の違いはどんな側面にあるのだろうか。

⑤推定による判断の提示

物事に対する判断を筆者の推測で述べる文。(29)のように一般論を提示する文と、(30)のように読者の立場や心情を推量して述べる文がある。また31のように自分の考えを読者と一致するものと推定して提示する文もある。そこには一般的な考えや読者の立場を踏まえた上で独自の視点を打ち出す姿勢や、筆者個人でなく多数の意見として論を展開しようとする意図が見られる。

(29) 恐らく日本でもっとも人気のある西洋の画家はルノワールであろう。

(30) ～を知らない人は、この書評欄の読者の中にはまずいないと思う。

(31) ～をみて、情けない気持ちになったのは私だけではあるまい。

4. 論述の展開方向の提示

文章全体の構成や筆者の執筆態度を表明する文。

①論点の予告

文章の要旨や課題、論述の対象や目的等、文章の中心的内容を伝えるもの。

(32) 本稿の目的は日本語教育における～を論ずることにある。

(33) ～超伝導ケーブル導体の典型的な例として、ここでは～をとりあげる。

②論述の立場の表明

筆者の論述の立場を表明し、判断の拠り所などを告げる。(35)のように研究の

位置づけを述べる文も、筆者の論述の立場を表明する働きを持つと考え、この型に分類した。

(34) 最近、大学の授業について、本欄でもいろいろ意見が出されているが、生徒を送りだす高校側からも考えてみたい。

(35) 本研究は～と題する研究の一環として行ったものである。

③論述の方針の提示

文章の展開や論述の順序に関する方針を述べる文。

(36) 記録として止めておくか、やや迷いはあったものの、これはやはり～を考え、冒頭で触れておくことにした。

(37) ～は多くの方々が紹介されているので、ここではふれない。

④用語・表記上の約束の提示

論述に必要な用語や表記上の約束について述べる文。いずれも理科系論文であり、こうした文を冒頭に据えるのは理系論文の一つの型であると言える。

(38) 元数 q の有限体 F_q 上の n 次の正則行列全体がつくる群を $GL(n, q)$ で表す。

5. 引用文の提示

引用提示だけでなく、(41)のように引用文を導く文もこの型に類別した。

(39) 「またかぜひいちゃったみたいだね」。火曜の朝、息子を診察した近所の小児科医が言った。

(40) ますらをの心はなくて秋萩の恋のみにやもなづみてありなむ～
萩は、万葉集で最も多く詠まれた植物で、集中百四十二首を数える。

(41) 著者は「あとがき」に言う。

(42) 百聞不如一見（漢書・趙充国伝）。視聴覚情報はコミュニケーションのメディアとして、非常に優れた性質を持っている。

(39)は会話により場面を設定し、(40)は論述の対象となる事柄の具体例の提示の為に冒頭で引用文を提示している。また書評では書物の一節を冒頭で引用して評論を展開していくことがある。他に著名人の言葉や箴言を提示して、論拠を補強したり対比的内容を述べるための導入にしたり、(42)のように以下に展開する論述内容を象徴的に表す役目を持たせることがある。

冒頭における引用提示にはこのように様々な機能が見出されるが、共通するのは引用という形で提示することにより読者を引きつける効果を持つことと、いずれも文章の中心的な話題に密接に関わる内容を持つということである。

6. その他

以上のような冒頭文には分類できない13例をその他とした。いずれも論理的文章の冒頭文としては特殊なものといえる。主な例を挙げておく。

- (43) ～を阻止しようとしている皆さん。 ⇐呼びかけ
- (44) ～という新聞記事をご記憶だろうか。 ⇐問い掛け
- (45) エイズ、暴力、殺人、血、性差別…。 ⇐名詞提示
- (46) ～お慶び申し上げ、皇室のご幸福をお祈り申し上げます。⇐挨拶

(3) 冒頭文の内容の特徴

このように論理的文章の冒頭文 826例を分析した結果、その内容に主要な五つのタイプが認められたが、それぞれに特徴が認められた。

1.「事象の提示」の冒頭文は文章の中心的话题を提示する文である。2.「問題の略説」の冒頭文も話題に関して読者に知識を与える為に説明を行う文である。そして1.も2.も話題にする事柄の重要性を強調する文が多いのが特徴であった。論理的文章は問題を設定する必要性や意義を明確にすることが要求される文章であるから、冒頭文にもそうした性格が反映されているのだと言える。また3.「筆者の見解の提示」の冒頭文は論述の大枠を最初に提示する文で、4.「論述の展開方向の提示」の冒頭文と同じ働きを持つと言える。どちらも論述の中心的内容に関する情報を提示するものである。そして5.「引用文の提示」の冒頭文は様々な機能を持つが、共通点は読者を文章に引きつけるということと、論述の中心的话题に関わることを提示するということであった。

以上のどのタイプの冒頭文も、論述に導くために話題に関する知識を提供している。話題をめぐる論述をより良く理解する為に知っておくべき情報を「背景知識」と呼ぶなら、論理的文章の冒頭文に見いだされる機能は、まず論の中心的话题に関する背景知識を読者に提供することだと言える。

IV 文章の種類と冒頭文の関わり

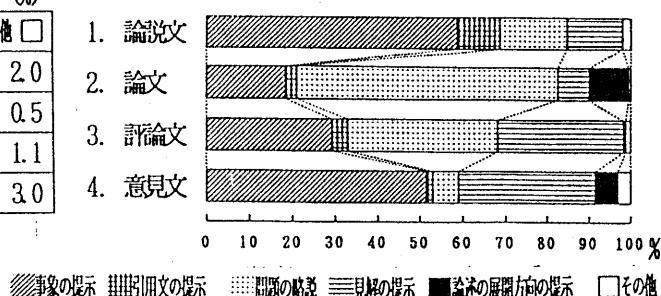
小論で考察の対象にしている論理的文章は、その目的や内容から四種類に分かれるが、各文章の冒頭文にはある傾向が見られる。表1は文章の種類別に冒頭文を分類した内訳で、図1は分類の結果を帯グラフにしたものである。

結論 「事象の提示」が最も多い。特に社説は43%を「出来事の提示」で占

文章の種類による冒頭文の違い 表 1 (%)

	事象の提示	引用文の提示	問題の略説	見解の提示	論述の展開方向の提示	その他
論説	50.1	10.1	16.2	13.4	0	2.0
論文	18.4	2.6	61.6	7.4	9.5	0.5
評論	20.3	3.7	35.1	30.3	0.5	1.1
意見文	51.5	1.5	6.0	32.5	5.5	3.0

図 1



めていた。社説は、その時に発生した事件や社会情勢について論じることの多い文章であるから、話題として取り上げる事実を冒頭で提示するのが一つの型になっていると言える。他の文章に比べて「引用文の提示」も多い。論説文は広い読者層が想定されるため、読者の興味を引く工夫が求められる。したがって、その傾向が冒頭文にも表れているものと考えられる。

鈴木(1989)は、論文で最初に結論や主題を述べない場合はテーマを「取り上げた理由／どの面から解明しようとするのか」等から書き出すことが普通だと述べているが、⁽⁶⁾ 今回の調査では「問題の略説」で始まる文章が最も多かった。研究の対象となる事柄の位置づけや背景の説明で文章が始まるのが論文の典型的なあり方である。「論の展開方向の提示」も他の文章に比べて多いが、論文は自説の正当性を証明するために考えを筋道立てて述べるのが最大の目的であるから、冒頭で論述の枠組みを提示することが多いのだと考えられる。また「見解の提示」を行う冒頭文が少ないが、論文では自説を主張するためには、まず客観的な論理の裏付けが必要とされるからであろう。

「見解の提示」は意見文と同様多い。中でも「評価・感想」が他の文章より多かった。評論文は自分の立場から事柄の評価や判断をする文章であるが、そうした性質が対象を論じる自分の立場を冒頭で明らかにすることの多さに表れていると考えられる。また「問題の略説」、特に「内容の説明」が論文に次いで多く、論文と同様、話題とする事柄の説明をまず提示しておくことが書き出しのパターンになっていると考えられる。

一番多いのは「事象の提示」で、取り上げられる話題の性質を反映していると言える。「見解の提示」は論理的文章中で最も多く、中でも「賛否の表明」は意見文だけに見られた内容であった。つまり意見文の多くが論述の中心となる主張を冒頭で提示していると言える。

このように冒頭文は文章の種類により性質が異なる。つまり文章の話題や目

的に応じて冒頭文の内容は選ばれたり制限を受けたりするのであり、冒頭文は文章の話題や論の目的を反映するのだと言える。佐久間他(1989)の研究で冒頭文が要約文に残存し易いことが指摘されているが、それと考え合わせると冒頭文は論述の中心的内容に関わる事柄を述べるものが多いと言うべきである。

従来から冒頭部は文章の構成に関わるものとして重要視されてきたが、そういった考え方に疑問が示されることもあった。⁽⁷⁾ 確かに「筆者の個性が発揮される箇所であるから」とか「文章は冒頭文からの展開により成り立つから」というだけでは、冒頭文と文章構成の関わりを説明することにはならないだろう。しかし今回の調査のようにある程度の数の文章を調べ、文章の種類別に冒頭文の傾向の違いを明らかにしたことにより、冒頭文が文章の内容や目的と密接に関わっているということが分かるわけである。

V 冒頭に現れない内容・現れにくい内容

これまで文章の冒頭文の内容を見てきたが、逆に文章の冒頭には現れない内容もある。確かに文章は筆者の個性を反映した創造物であり、何が文章として誤りだとか正しいとか言うことはできないが、今回のように大量の文章を調査した結果や、冒頭文に常識的な類型が存在しない小説との比較の結果から論理的文章の冒頭文に表れにくい内容を把握することが可能である。

今回の調査で冒頭文に見られなかった内容を、小説や末尾文との比較により導いた。

①文章を書く時に参考にした文献や資料について述べる文

「この文を書くにあたり、～を参考資料とした。」

「本文中の引用は、全て『～全集』によった。」

②文章を書くにあたってお世話になった人への謝辞

「～の機会を与えていただいた～氏に心から感謝申し上げたい。」

③読者への要求・要望を述べる文

「大方の御批正を乞う。」

「本稿に対するご意見をお聞かせいただければ幸いです。」

④論述の中で明らかにできなかった点や触れられなかった点を指摘する文

「今回は～の問題については十分に述べることはできなかった。」

⑤今後の課題や残された問題点について述べる文

「今回は～を中心に述べたが、今後は～も議論していく必要があろう。」

①②③はいずれも文章の中心的な内容と関わりの薄い事柄である。④⑤のように論述の欠点や問題点を表明する文も冒頭文になることがないようである。特に⑤は学術論文や評論文等で文章の末尾に置かれることの多い文である。

VI 冒頭文の機能に関する考察

ここまでの考察により、冒頭文の機能を次のようにまとめることが出来る。

冒頭文に見出される機能

1. 話題に関する背景知識を提示する。
2. 読むものの便宜を考えて、論述の立場、展開方向を示す。
3. 論述の課題が、取り上げるに足る有意味な事柄だということを示す。
4. 読者を引きつけつつ論述の内容に関わる情報性の高い事柄を提示する。

冒頭文に現れない内容について先に考察したが、それらに共通するのは論の内容とは直接関係がないという点であった。これは上に述べた冒頭文の機能を満たさないものである。また文章における欠点や足りない面に触れた冒頭文もないことがわかったが、これは読者を引きつける要素ではないため、冒頭文の機能4を満たさない。つまり上記の機能を満たさないものは冒頭文には現れないということである。こうしたことから、文章の冒頭に現れる文は冒頭文としての機能を満たすような内容を持つものだと言えるのである。

VII おわりに

私たちは文章を書く時に「冒頭文は、こういう内容でなければならない」といったことを考えるわけではなく、自分の自由な意思で冒頭文を選び取り文章を作っている。しかし、こうして 800余例の冒頭文を分析してみると冒頭文に見られる類型や特徴、機能が明らかとなった。外国語では傾向が異なることも考えられる。今後は小論での調査を資料として対照研究や日本語学習者の作文分析を行い、更に日本簿の文章の特徴を明らかにする必要がある。

なお、今回は触れられなかったが、冒頭文の形態の特質も冒頭文の機能と密接に関わり合うものである。その考察については別稿に譲ることにする。

<注>

- (1) 学習者の作文と日本人の文章との比較については渡邊(1993)に詳しい。
- (2) 成瀬(1978) (pp. 204~208)や、長坂(1993)を参照。

